

UD

【NRC自主調査レポート】

ユニバーサルデザイン社会の実現度 定点観測調査

～障害の社会モデルは日本社会にどこまで浸透しているか～
第3回（2019年9月）調査 中間レポート

2019年12月26日



株式会社日本リサーチセンター

<https://www.nrc.co.jp/>

I. ユニバーサルデザイン社会の実現度 定点観測調査について	3
II. 調査実施概要	6
III. 調査票の設計	7
IV. 調査結果 データ紹介編	
1. 障害理解の実態	
1) 社会のあり方に対する考え	12
① 共生社会推進に対する態度	12
② ユニバーサルデザインのまちづくり推進に対する態度	13
2) 障害・障害者に対する意識	14
① ステレオタイプ	14
② 心のバリアフリー（援助行動・交流意思）	15
③ 心のバリアフリー（無関心）	16
3) 障害の捉え方	17
① 障害の医学モデルへの賛同状況	17
② 障害の社会モデルへの賛同状況	18
4) 障害をめぐる意識・捉え方 時系列比較	19
2. 社会的障壁に接した場面での行動イメージ	20
3. 共生社会の実現度合評価	22
V. 調査結果 分析編	
(近日公開予定)	
■ 結果サマリー	26
■ 調査票（単純集計結果付）	
2019年調査票	30
2018年調査票	31
2017年調査票	32

🕒 ユニバーサルデザインとは

2020年オリンピック・パラリンピック東京大会のレガシー（後世に残され、未来に引き継がれる財産）として、共生社会の実現、ユニバーサルデザイン社会の実現、心のバリアフリーの推進を目指し、いま、日本が動いています。

障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいようあらかじめ都市や生活環境をデザインするという考え方、それが**ユニバーサルデザイン**です。

階段しかない建物では、車椅子や杖が必要な人が生活するのは困難ですが、最初からこのような人々も利用しやすい設計がなされていれば問題はありません。ユニバーサルデザインが広まれば、これまで障害のある人々が直面してきた社会の中にあるさまざまな障壁も取り除かれていきます。

障害の社会モデルという考え方があります。これは、「**障害は個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である**」として、「障害の原因は不利な状況をつくる社会の側にある」ことを説明するものです。障害の社会モデルは、2006年国際連合が採択した障害者権利条約に示され、「障害はもっぱら個人の機能的特質に起因する個人的な問題」としてきたそれまでの障害認識を大きく転換させました。

日本でも2016年施行の障害者差別解消法をはじめとして障害の社会モデルに基づく諸施策がスタートし、ユニバーサルデザインによるまちづくりを進めていくため、2017年にはユニバーサルデザイン2020関係閣僚会議によって「ユニバーサルデザイン2020行動計画」が策定されました。

🔄 調査実施の背景と目的

日本リサーチセンターは、内閣官房「平成28年度オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査（ユニバーサルデザインの社会づくりに向けた調査）」に調査事務局として参画し、ユニバーサルデザインを進めていくための試行プロジェクトの効果や改善点を調査・分析しました。そこでは、2016年当時の日本社会では障害の社会モデルの理解・実践はまだ十分なレベルに達しておらず、それを社会に浸透させていくことが喫緊の課題であることがわかりました。

2020年に向けて全国各地で心のバリアフリーを広める取り組み、誰もが安全で快適に移動できるユニバーサルデザインのまちづくりが進みつつあります。そこで弊社では、“調査”というツールを利用して、人々の意識や社会の動きをキャッチし、それを記録として残していきたいと考え、5年にわたる定点観測調査を企画しました。

ユニバーサルデザイン関係閣僚会議（事務局：内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部）

http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/udsuisin/index.html

ユニバーサルデザイン2020行動計画

http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/ud2020kkaigi/pdf/2020_keikaku.pdf

平成28年度オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査（ユニバーサルデザインの社会づくりに向けた調査）調査報告書

http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tokyo2020_suishin_honbu/udsuisin/pdf/201703_hokoku.pdf

🕒 定点観測の計画

「障害の社会モデルの考え方は日本社会にどこまで浸透していくのか」、歴史的なイベントである「2020年東京大会はユニバーサルデザイン社会の実現というレガシーを残すことができるのか」ということを知るため、2017年から2021年までの5年間、全国の一般市民（15～79歳）を対象とした全6回の定点観測調査を実施します。

	調査実施期間	結果公表
第1回調査	2017年11月2日～11月14日	(公開中) ユニバーサルデザイン理解・浸透度 定点観測調査 ～「障害の社会モデル」は日本社会にどこまで浸透しているか～ 第1回調査（2017年11月調査結果） https://www.nrc.co.jp/report/181016.html
第2回調査	2018年8月31日～9月12日	(第1回・第2回時系列レポート 公開中) ユニバーサルデザイン社会の実現度 定点観測調査 ～障害の社会モデルは日本社会にどこまで浸透しているか～ 第2回調査（2018年9月調査結果） https://www.nrc.co.jp/report/190627.html
第3回調査	2019年8月30日～9月11日	(公開中) ※本レポート
第4回調査	2020年5月頃実施予定 ※東京大会開催直前	2020年7月頃公開予定
<p>東京オリンピック競技大会開催 2020年7月24日（金）～ 8月9日（日） 東京パラリンピック競技大会開催 2020年8月25日（火）～ 9月6日（日）</p>		
第5回調査	2020年10月頃実施予定 ※東京大会開催直後	2020年12月頃公開予定
第6回調査	2021年9月頃実施予定	2021年11月頃公開予定

- ▲ 調査結果については、弊社ホームページにて公表します。
- ▲ 共生社会に向けた研究にご利用の場合は、無料で調査データを提供いたします（調査結果を引用等でお使いいただく場合には、弊社名の記載をお願いします）。

II. 調査実施概要

調査方法

調査員による個別訪問留置調査
日本リサーチセンターオムニバスサーベイ（NOS）を利用

調査対象

全国の15～79歳の男女個人 1,200人

抽出方法

層化3段抽出
【地点抽出】 全国200地点を、大字・町丁目を抽出単位として、9地域ブロック×4都市規模で層化無作為抽出
【世帯抽出】 全国住宅地図データベースを抽出フレームとして、各抽出地点で訪問世帯を等間隔抽出
【個人抽出】 各層の母集団の性別・年代構成比に合わせて各地点で依頼回収する性別・年代を割り当てる(1地点6人ずつ)
抽出世帯において、地点割当に合致する個人に依頼・回収する
母集団は2015年国勢調査人口を用いた

調査実施主体

株式会社日本リサーチセンター(自主調査)

日本リサーチセンター オムニバス サーベイ（NOS）について

弊社では、全国15～79歳男女1,200人を対象に、訪問留置オムニバス調査（NOS）を毎月定期的実施しています。
弊社訪問調査員が、層化無作為抽出した全国200地点で、住宅地図から無作為に抽出したお宅を訪問し、地域・都市規模と性年代が日本の人口構成に合致するように対象者に依頼する調査です。そのため、全体結果は、日本全国15～79歳男女の実態や意識をバランスよく反映したものとしてご覧になれます。

NOSの特長

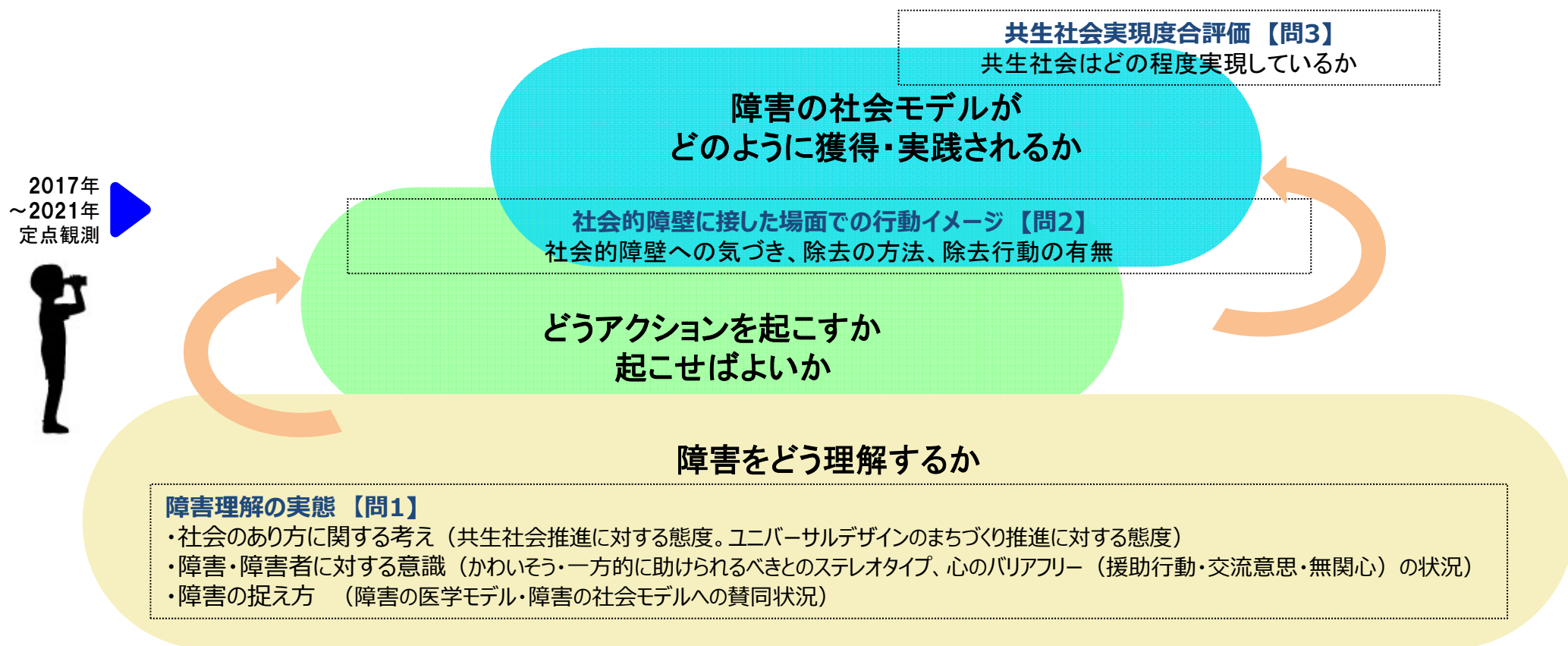
インターネットアンケートパネルを使って簡単に調査ができる時代になりましたが、日本リサーチセンターでは、50年近くにわたって、調査員を使った訪問留置、パネルモニターではない毎回抽出方式で、日本リサーチセンターオムニバスサーベイ「NOS」を継続実施し、代表性のある信頼の高いデータを提供してきました。
インターネット調査では、回収が難しい70代以上の対象者やインターネットを使っていない人の実態や意識を分析するのに有用な手法と言えます。

Ⅲ. 調査票の設計

調査票の設計にあたっては、内閣官房「平成28年度オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査（ユニバーサルデザインの社会づくりに向けた調査）」における試行プロジェクト審査委員会委員長の、慶應義塾大学経済学部 中野秦志教授にご助言いただきました。また、同調査でご協力をいただいた障害者団体にもご意見をお伺いし、一般財団法人全日本ろうあ連盟、全国手をつなぐ育成会連合会からいただいたご意見も踏まえて調査票を完成させました。ご協力に心より感謝申し上げます。

🕒ユニバーサルデザイン社会の実現度を測定するための3フェーズ

当調査では、ユニバーサルデザインの発想や障害の社会モデルが、人々にどのように理解され、社会に浸透しているのかを測定していきます。測定に際して、「障害の理解」、「アクション」、「障害の社会モデルの獲得・実践」という3つのフェーズを調査票に落とし込むことを念頭に置いて、設問を設計しました。



▲ 本調査において、障害の社会モデルの定義は、内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」に基づきました。

▲ 本調査及びレポートにおいて、「障害」の表記については、2010年内閣府障がい者制度改革推進会議の「「障害」の表記に関する検討結果について」に基づき、「障害」を用いています。

Ⅲ. 調査票の設計

障害をどう理解するか

問1は、社会のあり方に関する考えや、障害者に対する意識、障害の捉え方に関するa～iの9つの意見・認識に対する適合度合いを7段階で尋ね、障害理解の実態を測定する時系列設問です。

「障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応努力が必要である」とする従来の障害観である**障害の医学モデル**、そして「障害のあることはかわいそうであり、一方的に助けられるべき存在」といった**ステレオタイプ**が現在どの程度残留しているか、「障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である」とする**障害の社会モデル**の考え方がどの程度浸透しているかを把握します。

障害理解の実態【問1】時系列

【すべての方に】

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思うものに○をつけてください。

	(それぞれ○は1つずつ)						
	非常に そう 思う	そう 思う	やや そう 思う	やや ない と思う	あまり 思わ ない	そう 思わ ない	全く そう 思わ ない
a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切にし支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う	1	2	3	4	5	6	7
b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う	1	2	3	4	5	6	7
c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う	1	2	3	4	5	6	7
d) 障害のあることは、かわいそうだと思う	1	2	3	4	5	6	7
e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる	1	2	3	4	5	6	7
f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない	1	2	3	4	5	6	7
g) 障害の問題は、自分にはかかわりがない	1	2	3	4	5	6	7
h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応努力が必要である	1	2	3	4	5	6	7
i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である	1	2	3	4	5	6	7

探索領域	探索内容	調査項目	定義・出典
社会のあり方に関する考え	共生社会推進に対する態度	a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切にし支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う	(内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」より)
	ユニバーサルデザインのまちづくり推進に対する態度	b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う	
障害・障害者に対する意識	ステレオタイプ「一方的に助けられるべき存在」	c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う	内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」でのステレオタイプ意識例示より
	ステレオタイプ「かわいそう」	d) 障害のあることはかわいそうだと思う *2017年では「障害のある人は、かわいそうだと思う」としていましたが、2018年に変更しました。	
	心のバリアフリー（援助行動）	e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる	『心のバリアフリー』に向けた汎用性のある研修プログラムの基本プログラム評価ツール『研修における評価アンケート雛形』②より
	心のバリアフリー（交流意思）	f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない	
	心のバリアフリー（無関心）	g) 障害の問題は、自分にはかかわりがない	
障害の捉え方	障害の医学モデルへの賛同状況	h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応努力が必要である	文部科学省 障がい者制度改革推進会議資料での定義より
	障害の社会モデルへの賛同状況	i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である	内閣官房「ユニバーサルデザイン2020行動計画」での定義より

Ⅲ. 調査票の設計

どうアクションを起こすか・起こせばよいか

社会的障壁に接した場面での行動イメージ【問2】 時系列

問2は、具体的な社会的障壁のあるシチュエーション例を示し、このような状況に遭遇したときにどう考えるか、どのような行動を起こすと思うかを尋ねる時系列設問です。

項目アでは無関心・無関与の状況を把握し、項目イ・ウ・エでは分離発想について把握しようとしたものです*。

項目オ・キ・クはソフト面での社会的障壁解消、項目カはハード面での社会的障壁解消に関する方策例を示しました。

項目コは、社会的障壁に気づいた際に社会に対する自発行動を起こすかどうかを捉えようとして設計しました。

項目ケは、この社会的障壁解消・改善の店舗側の責任についての考えを尋ねるもので、第2回調査に新設しました。

*第1回調査では、「車いすや乳幼児連れの人専用の買物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい」という選択肢を用いましたが、第2回調査では、「一般客とは別に、車いすや乳幼児連れの人専用のエリアや通路を設けるのがよい」、「一般客とは別に、車いすや乳幼児連れの人たちの買い物時間帯を設けるのがよい」の二つに分けて聴取しました。さらに第3回調査ではこの二つの選択肢を「一般客とは別に、専用の売り場を設けるのがよい」と、「一般客とは別に、買い物時間帯を設けるのがよい」に変更しました。

*第2回調査から「すべての人が安全快適に買い物できる店をつくるのは当たり前のことなので、店はこの状況を改善する必要がある」を追加しました。

*第3回調査から複数回答ではなく、各項目ごとの単数回答としました。

障害の社会モデルがどのように獲得・実践されるか

問2 「ショッピングモールに多くの人が買物に来ていて、車いすのお客様、乳幼児連れのお客様が混雑の中で買物ができません」

このようなとき、あなたはどのように考えますか。(それぞれ〇は1つずつ)

	そう思う	そう 思わない
ア) 自分には関係ない・関わりたくない	→ 1	2
イ) 車いすや乳幼児連れの人とは混雑した場所に来ないほうがよい	→ 1	2
ウ) 一般客とは別に、専用の売り場を設けるのがよい	→ 1	2
エ) 一般客とは別に、買い物時間帯を設けるのがよい	→ 1	2
オ) 車いすや乳幼児連れのお客様の代わりに、店員が混雑した会場での買物を代行するのがよい	→ 1	2
カ) 狭い通路の売り場をつくらないようにするのがよい	→ 1	2
キ) 混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにするのがよい	→ 1	2
ク) 近くにいる客として、自分が、車いすや乳幼児連れの人に手助けが必要かを聞き、手伝いたい	→ 1	2
ケ) すべての人が安全快適に買い物できる店をつくるのは当たり前のことなので、店はこの状況を改善する必要がある	→ 1	2
コ) 店舗づくりや施設に関して不備に気づいたら、気づいた自分が店舗に改善提案をしていきたい	→ 1	2

ア) 自分には関係ない・関わりたくない	イ) 車いすや乳幼児連れの人とは混雑した場所に来ないほうがよい	車いすや乳幼児連れの人専用の買物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい (2017年選択肢3)	ウ) 一般客とは別に、専用の売り場を設けるのがよい	エ) 一般客とは別に、買い物時間帯を設けるのがよい	オ) 車いすや乳幼児連れのお客様の代わりに、店員が混雑した会場での買物を代行するのがよい	ク) 近くにいる客として、自分が、車いすや乳幼児連れの人に手助けが必要かを聞き、手伝いたい	キ) 混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにするのがよい	カ) 狭い通路の売り場をつくらないようにするのがよい	ケ) すべての人が安全快適に買い物できる店をつくるのは当たり前のことなので、店はこの状況を改善する必要がある	コ) 店舗づくりや施設に関して不備に気づいたら、気づいた自分が店舗に改善提案をしていきたい
無関心	分離による解決			ソフト面による解決			ハード面による解決	改善責任の認識	社会的障壁除去の為に社会への働きかけ	
				自発行動						
解決策イメージ										

どうアクションを起こすか・起こせばよいか

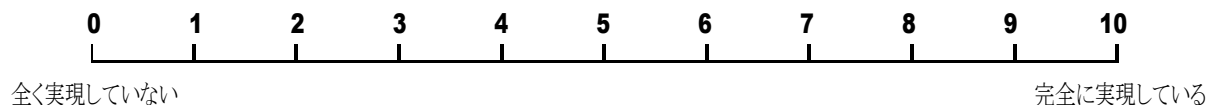
障害の社会モデルがどのように獲得・実践されるか

共生社会実現度合評価【問3】 時系列

問3は、人々が、社会ゴールである共生社会の現在の到達度をどの程度と捉えているかを測定します。

0:全く実現していない から 10:完全に実現している の10点満点（11段階）スケールで定点観測する設問です。

問3 いまの日本の社会は、どの程度、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会」を実現していると思いますか。 0～10までの11段階でお答えください。（○は1つだけ）



IV. 調査結果 データ紹介編

- ⊕ 図表中のnとは、比率算出の基数を表すもので、原則として回答総数、又は分類別の回答数を示している。
- ⊕ 百分比は、小数点第2位で四捨五入して、小数点第1位までを表示した。
四捨五入の関係で、合計値が100%とならないことがある。
- ⊕ 図表中「-」は、回答者が皆無であることを示す。

- ⊕ 以降の図表中のハッチングは次の基準に基づく。

全体に比べて+10^o イト以上

全体に比べて+5~9^o イト

全体に比べて-5~9^o イト

全体に比べて-10^o イト以上

1. 障害理解の実態 1) 社会のあり方に対する考え

① 共生社会推進に対する態度

【2019年】 共生社会推進に賛同する人（そう思う計）は、全体で9割を超え（93.4%）高水準。

▲ 女性は全年代で賛同者が9割を超えており、男性に比べて賛同者が多い。

【時系列変化】

共生社会推進への賛同率（そう思う計）は、2017年（88.4%）から2018年（93.5%）にかけて上昇。

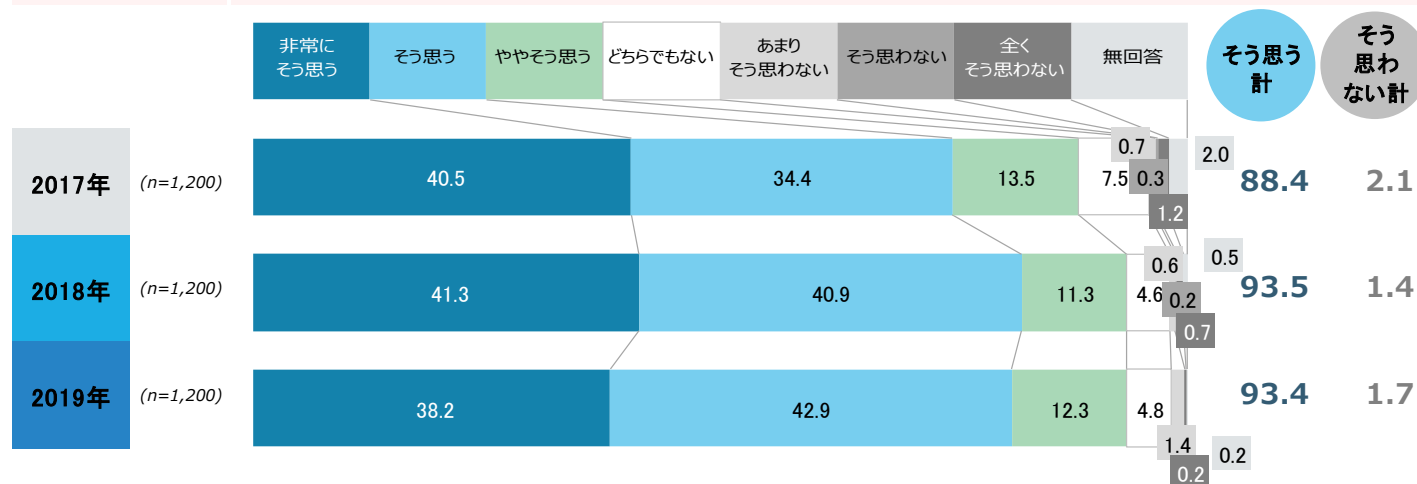
2018年と2019年はほぼ変わらず、93~94%の高水準を維持。

▲ 男女ともに40代は2017年からの2年間、上昇傾向が続く。

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。（1つだけ）

共生社会推進に対する態度

a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切にし支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う



そう思う 計比率 (%)

	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年	2019年- 2018年
全体	(n=1,200)	(n=1,200)	(n=1,200)	88.4	93.5	93.4	-0.1
男性小計	(n=596)	(n=592)	(n=592)	84.9	91.9	91.7	-0.2
15~19才	(n=36)	(n=37)	(n=37)	83.3	91.9	91.9	0.0
20~29才	(n=76)	(n=75)	(n=75)	78.9	92.0	89.3	-2.7
30~39才	(n=97)	(n=95)	(n=95)	82.5	91.6	88.4	-3.2
40~49才	(n=109)	(n=111)	(n=111)	82.6	91.9	95.5	3.6
50~59才	(n=92)	(n=93)	(n=93)	88.0	87.1	93.5	6.5
60~69才	(n=110)	(n=106)	(n=105)	89.1	95.3	89.5	-5.8
70~79才	(n=76)	(n=75)	(n=76)	88.2	93.3	93.4	0.1
女性小計	(n=604)	(n=608)	(n=608)	91.9	95.1	95.1	0.0
15~19才	(n=35)	(n=37)	(n=37)	85.7	97.3	97.3	0.0
20~29才	(n=73)	(n=73)	(n=73)	97.3	95.9	97.3	1.4
30~39才	(n=97)	(n=92)	(n=92)	93.8	96.7	96.7	0.0
40~49才	(n=105)	(n=110)	(n=110)	90.5	93.6	97.3	3.6
50~59才	(n=91)	(n=93)	(n=93)	89.0	96.8	96.8	0.0
60~69才	(n=112)	(n=115)	(n=115)	95.5	93.0	90.4	-2.6
70~79才	(n=91)	(n=88)	(n=88)	87.9	94.3	92.0	-2.3

1. 障害理解の実態 1)社会のあり方に対する考え

②ユニバーサルデザインのまちづくり推進に対する態度

【2019年】ユニバーサルデザインのまちづくり推進に賛同する人（そう思う計）は、全体で9割弱（88.6%）

▲ 男性に比べて女性のほうが賛同者が多い。

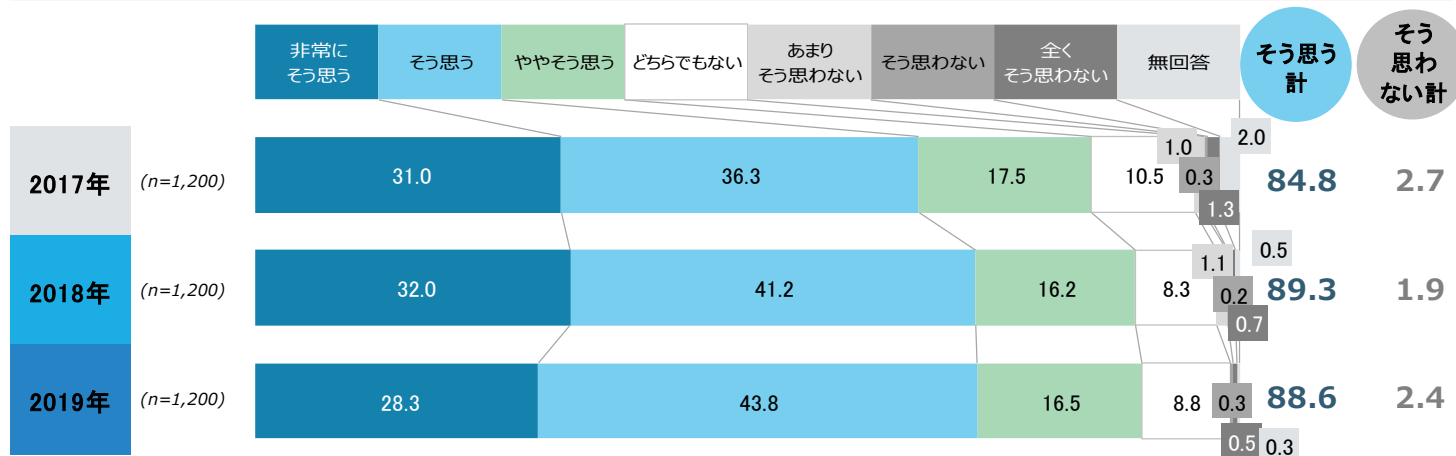
【時系列変化】ユニバーサルデザインのまちづくり推進の賛同率（そう思う計）は、2017年（84.8%）から2018年（89.3%）にかけて上昇。2018年と2019年はほぼ変わらず、89%の水準を維持。

▲ 男女ともに40代は2017年からの2年間、上昇傾向が続く。

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。（1つだけ）

ユニバーサルデザインのまちづくり推進に対する態度

b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う



そう思う 計比率 (%)

	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年	2019年-2018年
全体	(n=1,200)	(n=1,200)	(n=1,200)	84.8	89.3	88.6	-0.8
男性小計	(n=596)	(n=592)	(n=592)	81.7	87.2	85.8	-1.4
15~19才	(n=36)	(n=37)	(n=37)	72.2	91.9	89.2	-2.7
20~29才	(n=76)	(n=75)	(n=75)	77.6	90.7	78.7	-12.0
30~39才	(n=97)	(n=95)	(n=95)	80.4	84.2	84.2	0.0
40~49才	(n=109)	(n=111)	(n=111)	83.5	87.4	91.9	4.5
50~59才	(n=92)	(n=93)	(n=93)	82.6	86.0	84.9	-1.1
60~69才	(n=110)	(n=106)	(n=105)	83.6	89.6	85.7	-3.9
70~79才	(n=76)	(n=75)	(n=76)	85.5	82.7	85.5	2.9
女性小計	(n=604)	(n=608)	(n=608)	87.9	91.4	91.3	-0.2
15~19才	(n=35)	(n=37)	(n=37)	85.7	94.6	94.6	0.0
20~29才	(n=73)	(n=73)	(n=73)	94.5	97.3	90.4	-6.8
30~39才	(n=97)	(n=92)	(n=92)	88.7	93.5	91.3	-2.2
40~49才	(n=105)	(n=110)	(n=110)	86.7	88.2	94.5	6.4
50~59才	(n=91)	(n=93)	(n=93)	87.9	95.7	93.5	-2.2
60~69才	(n=112)	(n=115)	(n=115)	90.2	84.3	91.3	7.0
70~79才	(n=91)	(n=88)	(n=88)	81.3	92.0	84.1	-8.0

1. 障害理解の実態 2)障害・障害者に対する意識

①ステレオタイプ

【2019年】「障害者は一方的に助けられるべき存在」という意識について、そう思う計は36.8%、そう思わない計は37.4%で拮抗。

「障害のあることはかわいそう」という意識について、そう思う計は46.4%、そう思わない計は26.7%と開きあり。

▲「障害のある人は一方助けられるべき存在である」というステレオタイプの賛同者（そう思う計）は、女性70代で半数を超え、他層より多い。男女30代では29~30%で他層より少ない。

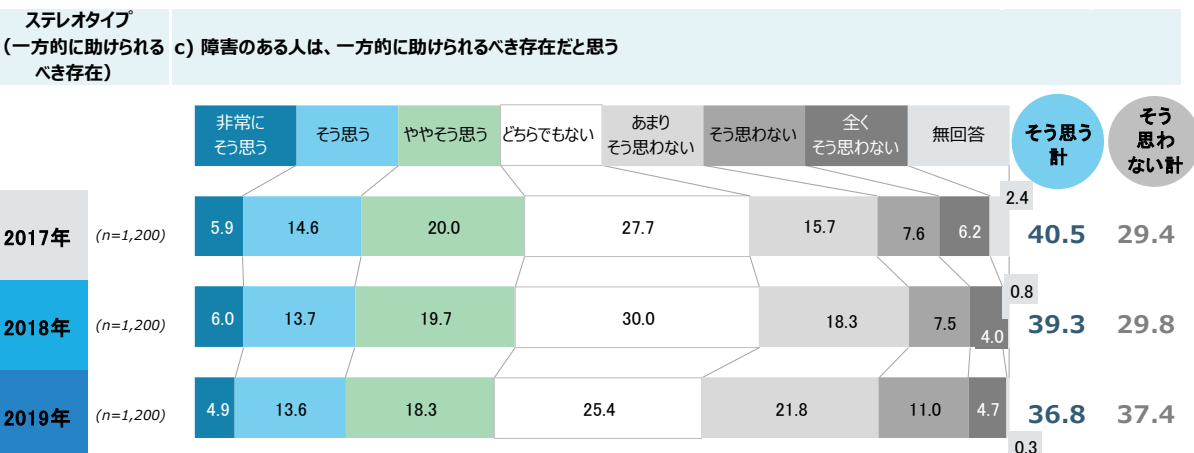
▲「障害のあることはかわいそうだと思う」というステレオタイプへの賛同者（そう思う計）は、男女70代と女性60代で半数を超え、他層より多い。

【時系列変化】「一方的に助けられるべき存在」について、そう思わない計の回答は2018年から2019年にかけて8ポイント上昇、そう思う計の回答も2017年以降年々下降傾向にあり、依然4割弱の人にこのステレオタイプが存在するものの、変化の兆しがみられる。

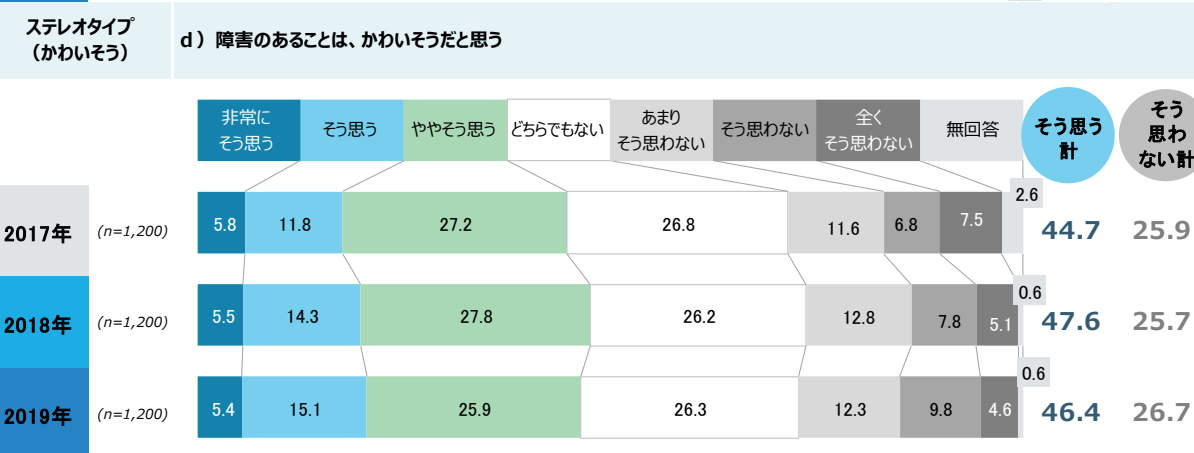
「かわいそう」という意識は2017年からほとんど変化せず。

▲「一方的に助けられるべき存在」への賛同者（そう思う計）は、2017年以降、男性20代、男性60~70代、女性60代で下降傾向にある。

▲「障害のあることはかわいそうだと思う」への賛同者（そう思う計）は、全体ではほぼ変化が見られないものの、男性30代、女性50代以上の層は、2017年以降、そう思う計の比率が上昇してきている。



問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。(1つだけ)



	そう思う 計比率 (%)			c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う				d) 障害のあることはかわいそうだと思う			
	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年	2019年-2018年	2017年	2018年	2019年	2019年-2018年
全体 (n=1,200)	40.5	39.3	36.8	40.5	39.3	36.8	-2.5	44.7	47.6	46.4	-1.2
男性小計 (n=596)	40.1	38.0	34.8	40.1	38.0	34.8	-3.2	48.5	47.0	46.3	-0.7
15~19才 (n=36)	36.1	43.2	37.8	36.1	43.2	37.8	-5.4	38.9	51.4	43.2	-8.1
20~29才 (n=76)	39.5	37.3	34.7	39.5	37.3	34.7	-2.7	42.1	42.7	42.7	0.0
30~39才 (n=97)	34.0	37.9	29.5	34.0	37.9	29.5	-8.4	33.0	34.7	41.1	6.3
40~49才 (n=109)	34.9	36.0	34.2	34.9	36.0	34.2	-1.8	50.5	43.2	48.6	5.4
50~59才 (n=92)	42.4	29.0	36.6	42.4	29.0	36.6	7.5	52.2	43.0	44.1	1.1
60~69才 (n=110)	43.6	41.5	33.3	43.6	41.5	33.3	-8.2	52.7	59.4	45.7	-13.7
70~79才 (n=76)	50.0	45.3	40.8	50.0	45.3	40.8	-4.5	65.8	57.3	57.9	0.6
女性小計 (n=604)	40.9	40.6	38.8	40.9	40.6	38.8	-1.8	40.9	48.2	46.5	-1.6
15~19才 (n=35)	45.7	40.5	43.2	45.7	40.5	43.2	2.7	37.1	51.4	35.1	-16.2
20~29才 (n=73)	42.5	50.7	38.4	42.5	50.7	38.4	-12.3	41.1	41.1	45.2	4.1
30~39才 (n=97)	30.9	34.8	30.4	30.9	34.8	30.4	-4.3	35.1	51.1	40.2	-10.9
40~49才 (n=105)	35.2	35.5	33.6	35.2	35.5	33.6	-1.8	40.0	42.7	39.1	-3.6
50~59才 (n=91)	37.4	30.1	39.8	37.4	30.1	39.8	9.7	38.5	46.2	47.3	1.1
60~69才 (n=112)	47.3	40.9	38.3	47.3	40.9	38.3	-2.6	43.8	53.0	53.9	0.9
70~79才 (n=91)	50.5	55.7	52.3	50.5	55.7	52.3	-3.4	48.4	52.3	58.0	5.7

*2017年に用いた「障害のある人は、かわいそうだと思う」を、2018年に「障害のあることは、かわいそうだと思う」に変更。

1. 障害理解の実態 2) 障害・障害者に対する意識

②心のバリアフリー（援助行動・交流意思）

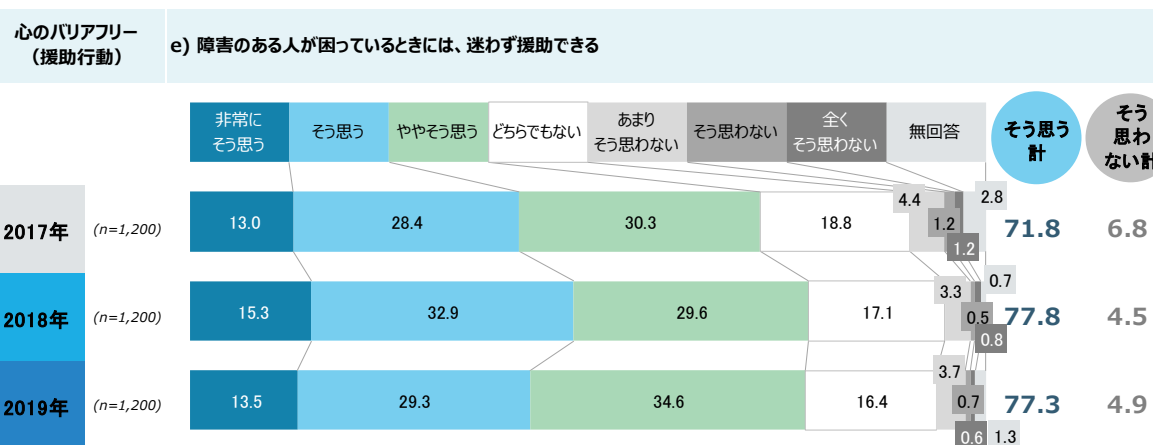
【2019年】「迷わず援助できる」（77.3%）、「自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない」（72.6%）はいずれも7割台（そう思う計）

- ▲ 「障害のある人が困っている時は迷わず援助できる」との回答が8割を超えて高いのは、男性50・70代、女性は40代・60～70代。
- ▲ 援助行動意識に比べて、「障害のある人を仲間に入れることに抵抗感はない」との意識は5ポイント低く（5%有意差あり）、いずれの性年代層においても8割を超えていない。
- ▲ 男性30代は、他層に比べて援助行動意識が低めで、かつ、障害者を仲間に入れることの抵抗感がない人が少ない。

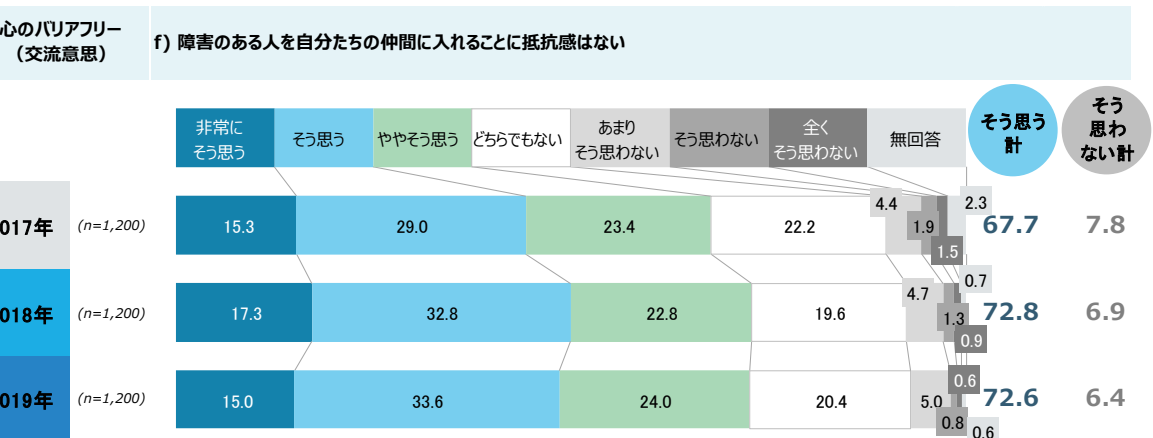
【時系列変化】 「迷わず援助できる」、「自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない」は、2017年から2018年に上昇したが、2018年以降は変化なし

- ▲ 「障害のある人が困っている時は迷わず援助できる」は、男性10代・30～40代・70代、女性40代では2017年から2年間連続して上昇傾向にある。また、2018年から2019年にかけて、男性50代・70代は10ポイント以上上昇した。
- ▲ 「障害のある人を仲間に入れることに抵抗感はない」は、男性40代、女性20代・40代・70代では2017年からの2年間連続して上昇傾向にある。2018年から2019年にかけて、男性50代は10ポイント以上上昇した一方で、女性30代・50代では約10ポイント下降した。

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。（1つだけ）



		e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる				f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない			
		そう思う 計比率 (%)				そう思う 計比率 (%)			
		2017年	2018年	2019年	2019年-2018年	2017年	2018年	2019年	2019年-2018年
全体	(n=1,200)	71.8	77.8	77.3	-0.4	67.7	72.8	72.6	-0.3
男性小計	(n=596)	68.6	73.8	76.2	2.4	63.9	70.4	72.1	1.7
15～19才	(n=36)	55.6	75.7	78.4	2.7	50.0	83.8	75.7	-8.1
20～29才	(n=76)	61.8	80.0	65.3	-14.7	53.9	69.3	68.0	-1.3
30～39才	(n=97)	56.7	62.1	69.5	7.4	56.7	66.3	64.2	-2.1
40～49才	(n=109)	71.6	73.0	78.4	5.4	65.1	73.0	74.8	1.8
50～59才	(n=92)	72.8	68.8	82.8	14.0	67.4	65.6	77.4	11.8
60～69才	(n=110)	80.9	84.9	75.2	-9.7	76.4	69.8	73.3	3.5
70～79才	(n=76)	69.7	73.3	84.2	10.9	65.8	73.3	72.4	-1.0
女性小計	(n=604)	74.8	81.6	78.5	-3.1	71.4	75.2	73.0	-2.1
15～19才	(n=35)	65.7	86.5	75.7	-10.8	68.6	81.1	78.4	-2.7
20～29才	(n=73)	64.4	72.6	71.2	-1.4	64.4	72.6	74.0	1.4
30～39才	(n=97)	69.1	80.4	72.8	-7.6	78.4	75.0	65.2	-9.8
40～49才	(n=105)	67.6	81.8	82.7	0.9	70.5	73.6	77.3	3.6
50～59才	(n=91)	76.9	82.8	77.4	-5.4	74.7	79.6	68.8	-10.8
60～69才	(n=112)	89.3	83.5	81.7	-1.7	71.4	74.8	73.9	-0.9
70～79才	(n=91)	81.3	84.1	83.0	-1.1	68.1	72.7	76.1	3.4



1. 障害理解の実態 2)障害・障害者に対する意識

③心のバリアフリー（無関心）

【2019年】

「障害の問題は、自分にはかかわりがない」について、そう思う計（無関心層）は約1割（10.3%）、そう思わない計は7割弱（68.6%）

▲ 「障害の問題は、自分にはかかわりがない」との無関心の意識は、男女ともに20代以下の若年層に高い傾向がみられる。特に男性20代では2割を超えている。一方、女性60代では4%と、無関心層が少ない。

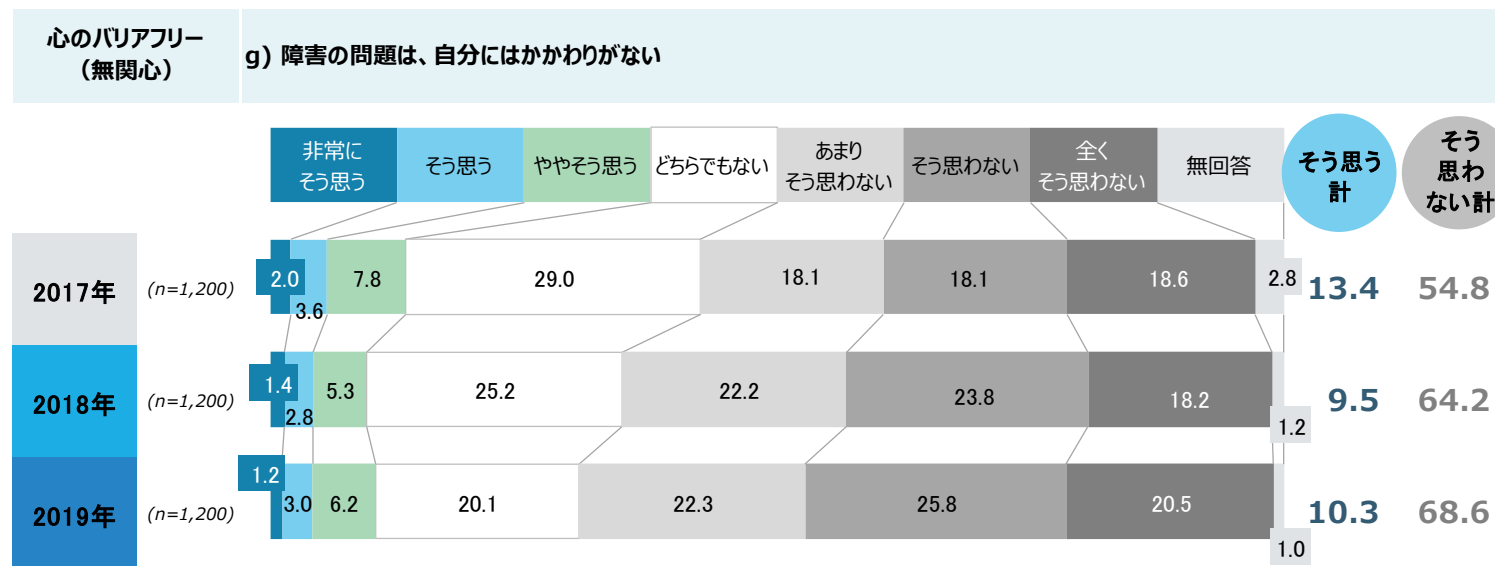
【時系列変化】

2017年に13.4%であった無関心層は、2018年に約1割に下がった後、2019年も横ばいで推移

そう思わない計は、2017年54.8%、2018年64.2%、2019年68.6%と年々上昇

▲ 男性30代・50代は、2017年からの2年連続して下降傾向にある。

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。（1つだけ）



そう思う 計比率 (%)

	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年	2019年-2018年
全体	(n=1,200)	(n=1,200)	(n=1,200)	13.4	9.5	10.3	0.8
男性小計	(n=596)	(n=592)	(n=592)	15.8	10.8	11.7	0.8
15~19才	(n=36)	(n=37)	(n=37)	30.6	10.8	13.5	2.7
20~29才	(n=76)	(n=75)	(n=75)	18.4	9.3	21.3	12.0
30~39才	(n=97)	(n=95)	(n=95)	17.5	13.7	9.5	-4.2
40~49才	(n=109)	(n=111)	(n=111)	16.5	9.9	12.6	2.7
50~59才	(n=92)	(n=93)	(n=93)	14.1	11.8	8.6	-3.2
60~69才	(n=110)	(n=106)	(n=105)	11.8	10.4	9.5	-0.9
70~79才	(n=76)	(n=75)	(n=76)	10.5	9.3	9.2	-0.1
女性小計	(n=604)	(n=608)	(n=608)	11.1	8.2	9.0	0.8
15~19才	(n=35)	(n=37)	(n=37)	22.9	10.8	16.2	5.4
20~29才	(n=73)	(n=73)	(n=73)	13.7	20.5	17.8	-2.7
30~39才	(n=97)	(n=92)	(n=92)	19.6	7.6	9.8	2.2
40~49才	(n=105)	(n=110)	(n=110)	12.4	8.2	8.2	0.0
50~59才	(n=91)	(n=93)	(n=93)	5.5	4.3	6.5	2.2
60~69才	(n=112)	(n=115)	(n=115)	4.5	3.5	4.3	0.9
70~79才	(n=91)	(n=88)	(n=88)	7.7	8.0	8.0	0.0

1. 障害理解の実態 3) 障害の捉え方

① 障害の医学モデルへの賛同状況

【2019年】

障害をもつばら個人の問題に帰結させる障害の医学モデルの賛同者（そう思う計）は約3割半（34.2%）、そう思わない計は約4割（39.0%）

- 医学モデルの賛同者は、男女ともに70代では5割前後で他層より多いほか、男性20代以下も4割以上で高め。他方、女性20～50代と男性50代では3割を下回っている。

【時系列変化】

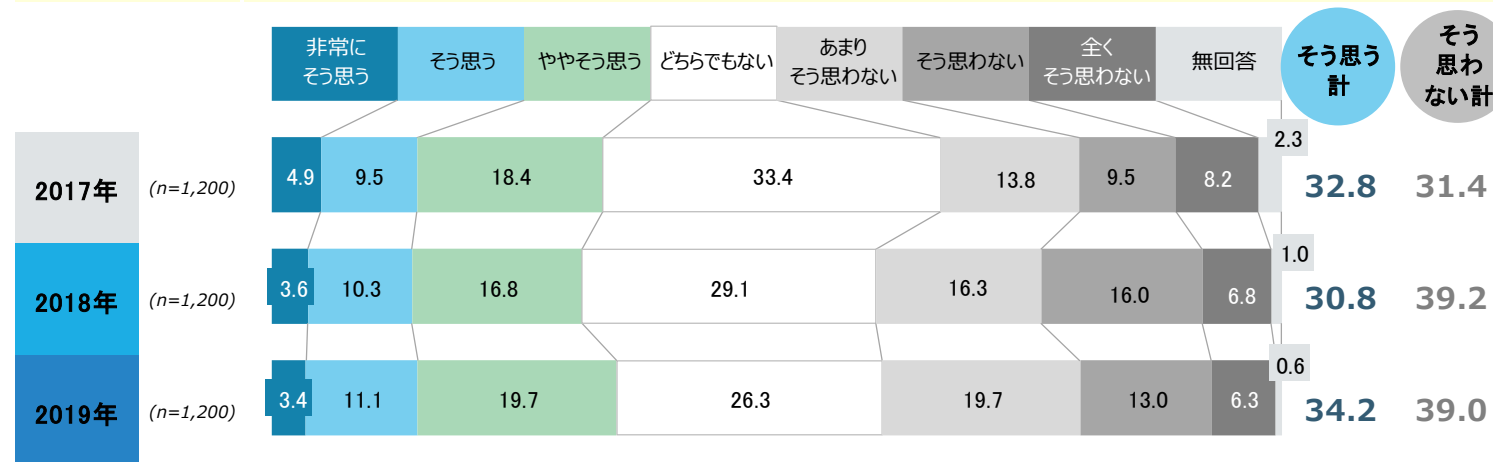
医学モデル賛同者は2017年～2019年の3年間で3割台前半のままほとんど変化せず。そう思わない計は、2017年（31.4%）から2018年（39.2%）で上昇し、2019年は同レベルで推移（39.0%）。

- 全体では変化が見られないものの、そう思う計は男性50代、女性40代で2017年からの2年連続して下降傾向。一方、男性20代、女性60代以上は2年連続上昇傾向。

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。（1つだけ）

障害の医学モデルへの賛同状況

h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応能力が必要である



そう思う 計比率 (%)

	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年	2019年- 2018年
全 体	(n=1,200)	(n=1,200)	(n=1,200)	32.8	30.8	34.2	3.4
男性小計	(n=596)	(n=592)	(n=592)	36.6	31.6	36.5	4.9
15～19才	(n=36)	(n=37)	(n=37)	38.9	29.7	43.2	13.5
20～29才	(n=76)	(n=75)	(n=75)	34.2	36.0	44.0	8.0
30～39才	(n=97)	(n=95)	(n=95)	36.1	29.5	31.6	2.1
40～49才	(n=109)	(n=111)	(n=111)	33.9	24.3	34.2	9.9
50～59才	(n=92)	(n=93)	(n=93)	33.7	29.0	24.7	-4.3
60～69才	(n=110)	(n=106)	(n=105)	38.2	34.9	37.1	2.2
70～79才	(n=76)	(n=75)	(n=76)	43.4	40.0	48.7	8.7
女性小計	(n=604)	(n=608)	(n=608)	29.1	29.9	31.9	2.0
15～19才	(n=35)	(n=37)	(n=37)	22.9	32.4	32.4	0.0
20～29才	(n=73)	(n=73)	(n=73)	26.0	30.1	28.8	-1.4
30～39才	(n=97)	(n=92)	(n=92)	25.8	23.9	26.1	2.2
40～49才	(n=105)	(n=110)	(n=110)	30.5	26.4	24.5	-1.8
50～59才	(n=91)	(n=93)	(n=93)	25.3	18.3	26.9	8.6
60～69才	(n=112)	(n=115)	(n=115)	29.5	33.0	34.8	1.7
70～79才	(n=91)	(n=88)	(n=88)	39.6	47.7	51.1	3.4

1. 障害理解の実態 3) 障害の捉え方

② 障害の社会モデルへの賛同状況

【2019年】 障害の社会モデルの賛同者（そう思う計）は7割弱（68.0%）

▲ いずれの性年代層でも賛同者は6割を超えるが、男性60代、女性20代では賛同者が7割を超え、他層に比べて高い。

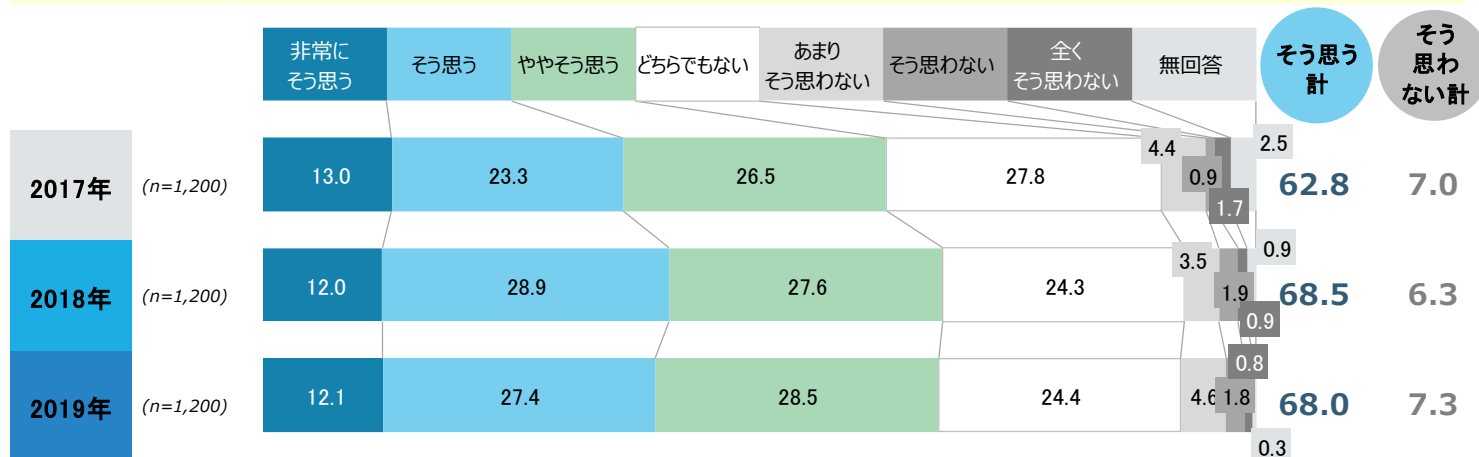
【時系列変化】 障害の社会モデルの賛同率は、2017年（62.8%）から2018年（68.5%）に上昇し、2019年（68.0%）はほぼ変わらず

▲ 男女10代、男性30代、女性20代・70代は、2017年からの2年連続で上昇傾向が続く。中でも女性20代は5割→6割→7割半と上昇し、この2年間で伸びが大きい。

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。（1つだけ）

障害の社会モデルへの賛同状況

i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である



そう思う 計比率 (%)

	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年	2019年-2018年
全体	(n=1,200)	(n=1,200)	(n=1,200)	62.8	68.5	68.0	-0.5
男性小計	(n=596)	(n=592)	(n=592)	64.3	67.9	67.4	-0.5
15~19才	(n=36)	(n=37)	(n=37)	47.2	62.2	67.6	5.4
20~29才	(n=76)	(n=75)	(n=75)	56.6	65.3	65.3	0.0
30~39才	(n=97)	(n=95)	(n=95)	49.5	61.1	65.3	4.2
40~49才	(n=109)	(n=111)	(n=111)	63.3	69.4	63.1	-6.3
50~59才	(n=92)	(n=93)	(n=93)	70.7	68.8	65.6	-3.2
60~69才	(n=110)	(n=106)	(n=105)	73.6	73.6	76.2	2.6
70~79才	(n=76)	(n=75)	(n=76)	78.9	70.7	68.4	-2.2
女性小計	(n=604)	(n=608)	(n=608)	61.3	69.1	68.6	-0.5
15~19才	(n=35)	(n=37)	(n=37)	51.4	62.2	64.9	2.7
20~29才	(n=73)	(n=73)	(n=73)	53.4	61.6	75.3	13.7
30~39才	(n=97)	(n=92)	(n=92)	54.6	69.6	65.2	-4.3
40~49才	(n=105)	(n=110)	(n=110)	61.9	69.1	69.1	0.0
50~59才	(n=91)	(n=93)	(n=93)	63.7	69.9	68.8	-1.1
60~69才	(n=112)	(n=115)	(n=115)	70.5	77.4	68.7	-8.7
70~79才	(n=91)	(n=88)	(n=88)	63.7	65.9	67.0	1.1

1. 障害理解の実態 4) 障害をめぐる意識・捉え方 時系列比較

障害をめぐる意識・捉え方について、「そう思う計」比率で2017年から2019年の変化を追ったところ、2018年から2019年にかけての変化はいずれも見られず、横ばいとなった。2017年から、2018年・2019年に対する変化は以下の通り。

**2017年→2018・2019年
に対して変化したもの**

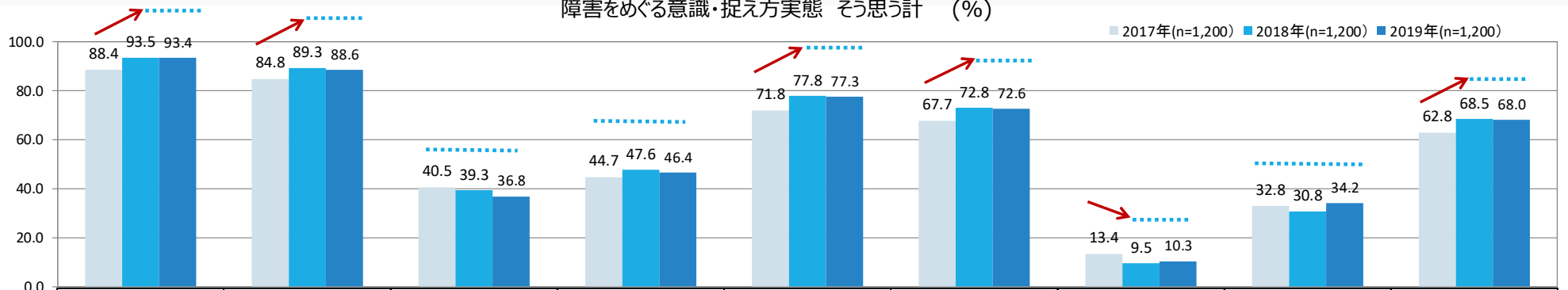
- 【上昇】 共生社会推進に対する賛同、ユニバーサルデザインのまちづくりに対する賛同、心のバリアフリー（援助意識、交流意思）、障害の社会モデルへの賛同
- 【下降】 心のバリアフリー（無関心）

**2017・2018・2019年の
3年間で変化しなかったもの**

ステレオタイプ（「一方的に助けられるべき存在」「障害があることはかわいそう」）
障害の医学モデルへの賛同

- △ 2018年・2019年において、共生社会推進、ユニバーサルデザインのまちづくり推進への賛同率は9割前後、困っている障害者に対する援助、障害がある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感がないとする回答率はともに7割台、障害の社会モデルへの賛同は7割弱と高い。これらはいずれも、2017年～2018年の1年間で有意に増加し、2018年～2019年で同レベルで推移した。また、無関心率は2017年～2018年で4ポイント減少し、2018年・2019年は約1割となった。このように、ユニバーサルデザイン社会を実現しようとする人々の意識、心のバリアフリー意識は2017年以降一定程度の高まりを見せた。しかし、2018年・2019年では心のバリアフリーは7割台、障害の社会モデルへの賛同は7割弱のレベルで止まっている。
- △ 「障害のある人は一方助けられるべき存在」とするステレオタイプは下降の兆しがみられるものの、「障害のあることはかわいそう」とするステレオタイプ、障害の医学モデルに対する賛同率は、3年間で低下することはないままで推移している。

障害をめぐる意識・捉え方実態 そう思う計 (%)



a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することができる共生社会を実現すべきだと思う
 b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う
 c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う
 d) 障害のあることはかわいそうだと思う
 e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる
 f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない
 g) 障害の問題は、自分にはわかりにくい
 h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応努力が必要である
 i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会的責務である

	共生社会推進に対する態度			ユニバーサルデザインに対する態度			ステレオタイプ			心のバリアフリー			障害の医学モデルへの賛同			障害の社会モデルへの賛同											
	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年	2017年	2018年	2019年									
2018年-2017年	5.1	*		4.5	*		-1.2			6.0	*		5.2	*		-3.9	*		-2.1		5.8	*					
2019年-2018年			-0.1			-0.8			-2.5			-1.2				-0.4			0.8		3.4			-0.5			
2019年-2017年	5.0		*	3.8		*	-3.7			1.8			5.6		*	4.9		*	-3.1		*	1.3			5.3		*

* : 5%有意

2. 社会的障壁に接した場面での行動イメージ

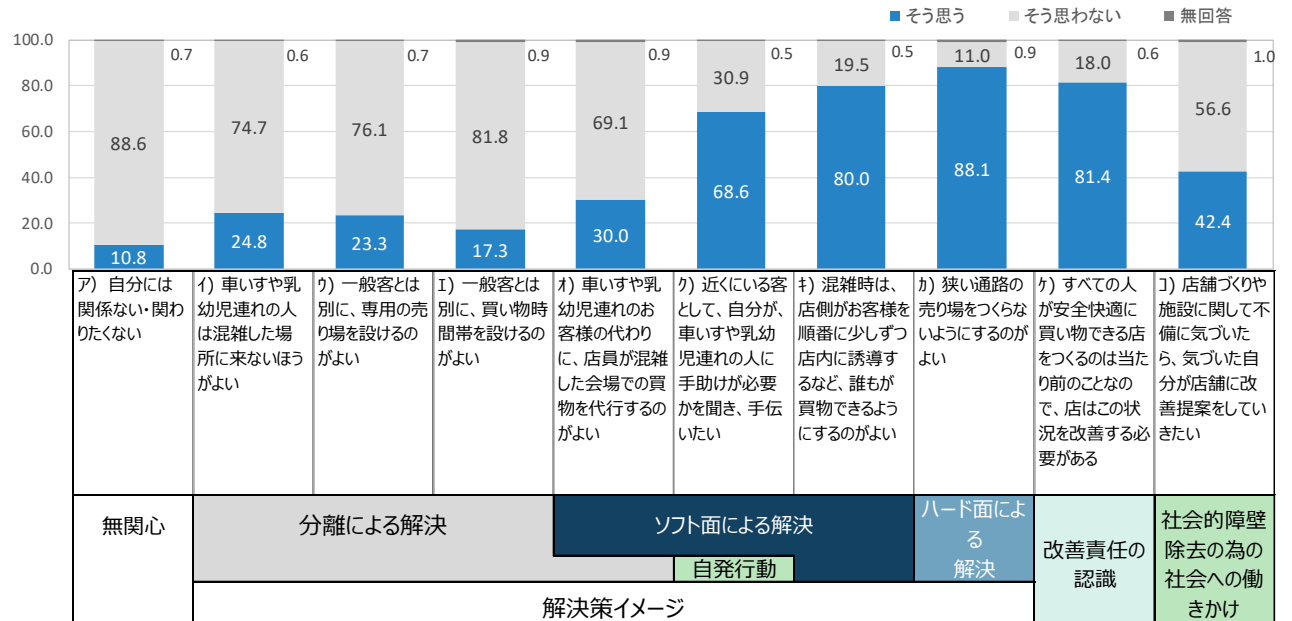
混雑したショッピングモールでの買物場面を例に、社会的障壁のある状況での考え方や自身がとると思う行動について、それぞれ単数回答で尋ねた結果は以下の通り。

【2019年】

- ・解決方法イメージ：「狭い売り場を作らない」(カ)とのハード面での解決方法、「順番に誘導する」(キ)とのソフト面での解決方法がともに8割台で高い
- ・改善責任の認識：混雑して買い物できない状況をつけた設置者(店)の改善責任(ケ)は、約8割に認識されている
- ・社会的障壁除去のための社会への働きかけ：「不備に気づいた自分が店舗に改善提案していきたい」(コ)と社会に働きかける行動を起こす意思のある人は約4割
- ・混雑した場所に来ないほうがよい(イ)、専用の売り場や時間帯を設ける(ウ、エ)といった分離による解決策を考える人は2割前後存在している
- ▲ 「ク) 近くにいる客として、自分が、車いすや乳幼児連れの人に手助けが必要かを聞き、手伝いたい」とする自発行動による解決策は、男性に比べて女性で高い。
- ▲ 分離による解決方法は、20代男性に高めである。
- ▲ 社会的障壁除去の為に社会への働きかけ(コ)は、男女ともに60代以上で高く、男女20代で低めとなっている。

問2 「ショッピングモールに多くの人が買物に来ていて、車いすのお客様、乳幼児連れのお客様が混雑の中で買物ができません」 このようなとき、あなたはどのように考えますか。(それぞれ○は1つずつ)

2019年



全体 (n=1,200)	各項目単数回答	解決策イメージ									
		無関心	分離による解決		ソフト面による解決			ハード面による解決	改善責任の認識	社会的障壁除去の為に社会への働きかけ	
全体		10.8	24.8	23.3	17.3	30.0	68.6	80.0	88.1	81.4	42.4
男性小計 (n=592)		15.2	28.5	26.0	18.9	34.3	62.7	78.4	86.7	79.4	41.9
15~19才 (n=37)		16.2	37.8	40.5	13.5	48.6	67.6	70.3	86.5	75.7	43.2
20~29才 (n=75)		25.3	46.7	38.7	32.0	36.0	42.7	81.3	85.3	72.0	30.7
30~39才 (n=95)		13.7	17.9	24.2	15.8	27.4	56.8	76.8	82.1	75.8	37.9
40~49才 (n=111)		11.7	22.5	25.2	17.1	35.1	70.3	73.9	89.2	82.0	39.6
50~59才 (n=93)		18.3	29.0	21.5	16.1	38.7	62.4	83.9	83.9	80.6	41.9
60~69才 (n=105)		13.3	31.4	21.9	15.2	28.6	66.7	77.1	89.5	81.0	49.5
70~79才 (n=76)		10.5	23.7	21.1	23.7	35.5	71.1	82.9	89.5	85.5	50.0
女性小計 (n=608)		6.4	21.1	20.6	15.6	25.8	74.3	81.6	89.5	83.4	42.9
15~19才 (n=37)		8.1	24.3	54.1	29.7	35.1	70.3	81.1	91.9	83.8	43.2
20~29才 (n=73)		9.6	21.9	26.0	19.2	30.1	69.9	80.8	89.0	80.8	28.8
30~39才 (n=92)		7.6	23.9	20.7	17.4	20.7	75.0	82.6	92.4	82.6	41.3
40~49才 (n=110)		5.5	26.4	18.2	19.1	29.1	78.2	81.8	91.8	84.5	41.8
50~59才 (n=93)		6.5	17.2	16.1	10.8	26.9	68.8	79.6	92.5	87.1	41.9
60~69才 (n=115)		0.9	16.5	13.9	10.4	22.6	81.7	85.2	91.3	83.5	49.6
70~79才 (n=88)		10.2	19.3	18.2	12.5	22.7	70.5	78.4	77.3	80.7	50.0

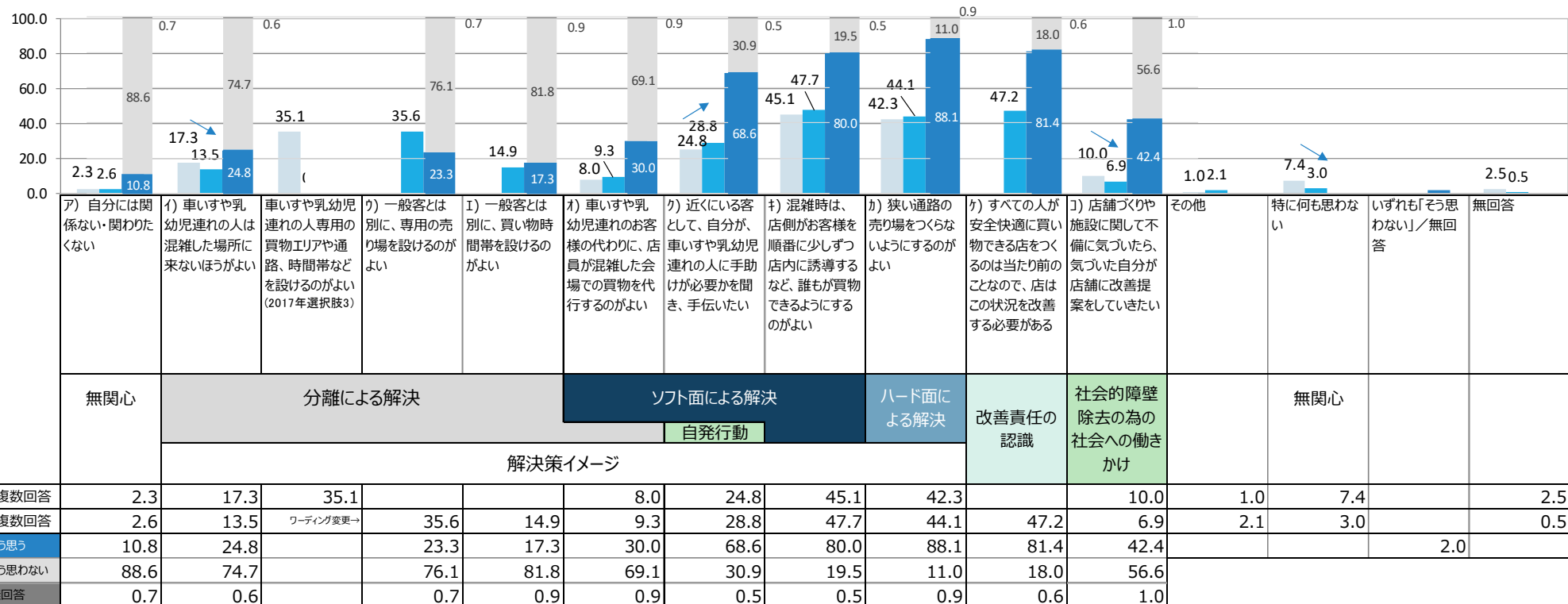
2. 社会的障壁に接した場面での行動イメージ 時系列比較(参考)

社会的障壁のある状況での考え方や自身がとると思う行動について、混雑したショッピングモールでの買物場面を例に、2017年・2018年は複数回答の設問で尋ねてきたが、複数回答では個々の意見・行動に対する意見が明確に捉えきれない（その項目に選択していないことが、非賛同なのか、単に反応しなかった＝無回答なのかの区別がつかない）ことから、2019年はそれぞれ単数回答で尋ねる形に変更した（2020年調査以降は、2019年同様の単数回答形式での設問を予定している）。

そのため、2018年までと2019年を単純に比較することはできないが、参考として、2018年までの複数回答での回答率と、2019年の単数回答の回答状況を整理したものが以下となる。

- ▲ 同じ複数回答形式で尋ねた2017年から2018年にかけての変化としては、自身の援助意欲（「ク）近くにいる客として手伝いたい」）が上昇し、自分が単独で動く範囲での行動意欲については高まりがみられた。また、「イ）車いすや乳幼児連れの人は混雑した場所に来ないほうがよい」との分離による解決が低下した。一方で、「J）店舗づくりや施設に関して不備に気づいたら、気づいた自分が店舗に改善提案をしていきたい」との、社会的障壁除去のための社会的行動意欲については低下が見られた。
- ▲ 各単数回答で聴取した2019年と、複数回答で聴取した2017年・2018年も、解決策イメージとして賛同率が高かったのは、「カ）狭い売り場を作らない」とのハード面での解決方法、「キ）順番に誘導する」とのソフト面での解決方法である。「イ）車いすや乳幼児連れの人は混雑した場所に来ないほうがよい」や、「ウ）一般客とは別に、専用の売り場を設けるのがよい」、「エ）一般客とは別に、買い物時間帯を設けるのがよい」などの分離による解決への賛同率は、ハード・ソフト面による解決に比べると低いという点も大きな構造としては同様であるが、時系列推移については2019年と2020年以降での比較によって明らかにしていきたい。

問2 「ショッピングモールに多くの人が買物に来ていて、車いすのお客様、乳幼児連れのお客様が混雑の中で買物できません」 このようなとき、あなたはどのように考えますか。（それぞれ○は1つずつ）

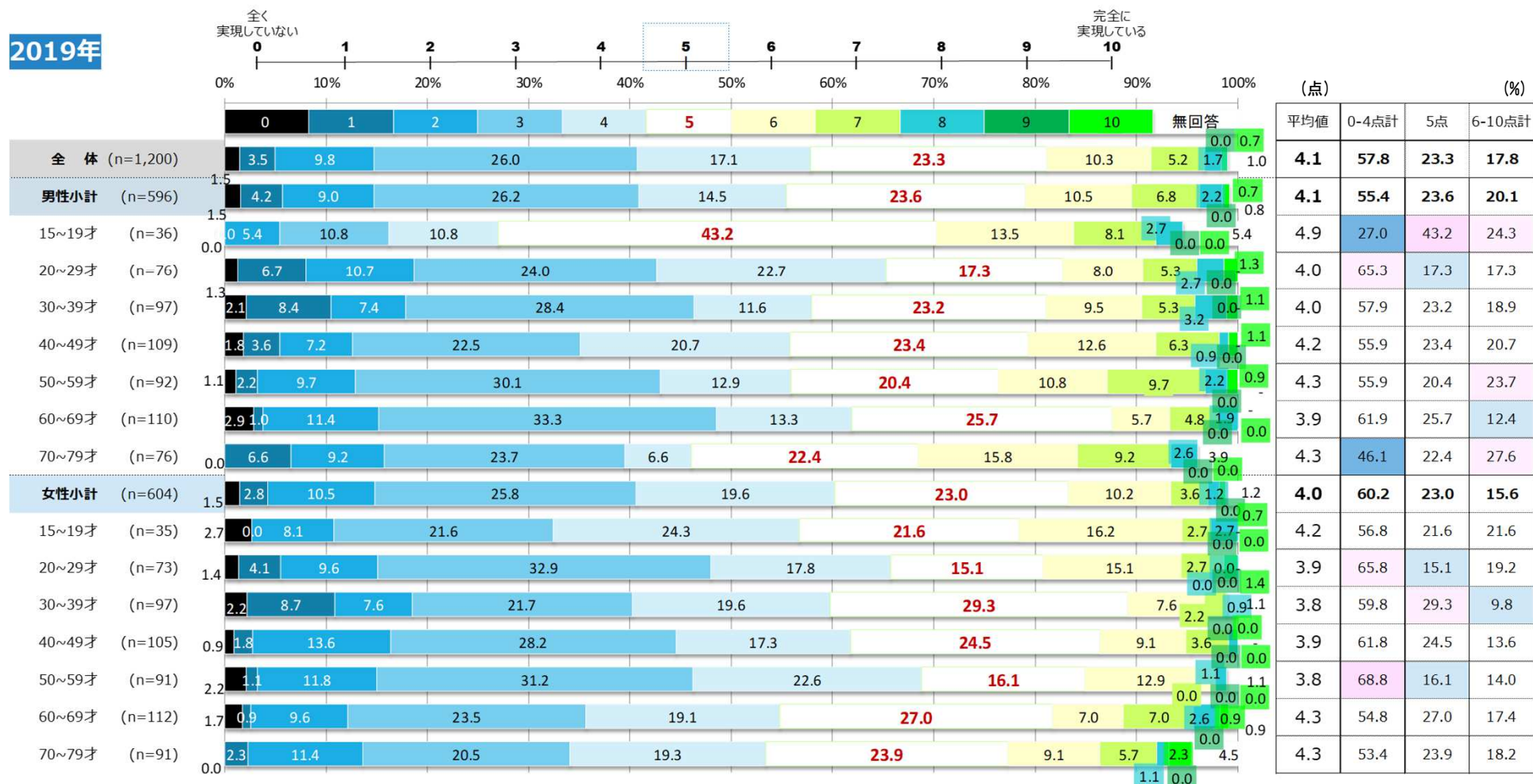


3. 共生社会の実現度合評価

【2019年】2019年の日本の共生社会実現度合(平均値) は10点満点中4.1点

- ▲ 社会全体としては、実現レベル評価がちょうど中間（5点、23%）の位置を中心に見て、「実現していない」に近いと考える人（0~4点）が6割弱、「実現している」に近いと考える人（6~10点）が2割弱となっており、大半の人が、2019年時点の日本は共生社会が実現できていないと考えている。
- ▲ 全体に比べて、男性10代（平均4.9点）は実現度評価が高め（甘い評価）であるのに対し、女性30代・50代（ともに平均3.8点）では実現度評価が低め（辛い評価）となっている。

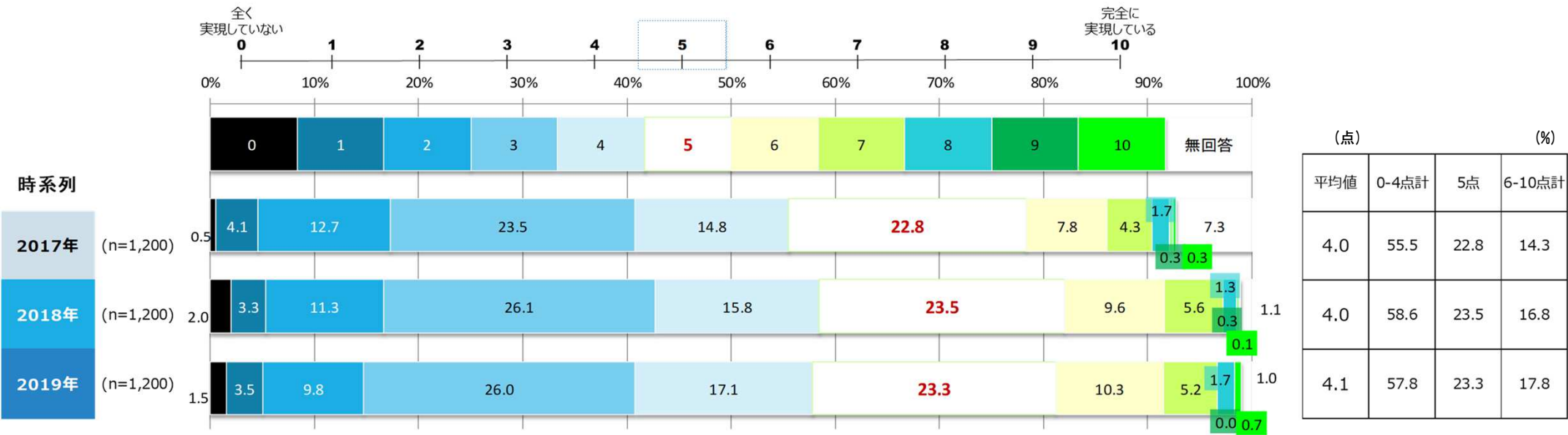
問3 いまの日本の社会は、どの程度、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会」を実現していると思いますか。0~10までの11段階でお答えください。（○は1つだけ）



3. 共生社会の実現度合評価 時系列比較

【時系列変化】 共生社会実現度合評価 (10点満点) 平均値は、2017年・2018年4.0点、2019年4.1点。3年間を通じて、共生社会が実現しているとの認識は低いまま推移し、ほとんど変化せず。

問3 いまの日本の社会は、どの程度、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切にし支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会」を実現していると思いますか。0～10までの11段階でお答えください。(○は1つだけ)



	全体	0 全く実現して いない	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10 完全に実現 している	無回答	平均値
2017年	(n=1,200)	0.5	4.1	12.7	23.5	14.8	22.8	7.8	4.3	1.7	0.3	0.3	7.3	4.0
2018年	(n=1,200)	2.0	3.3	11.3	26.1	15.8	23.5	9.6	5.6	1.3	0.3	0.1	1.1	4.0
2019年	(n=1,200)	1.5	3.5	9.8	26.0	17.1	23.3	10.3	5.2	1.7	0.0	0.7	1.0	4.1

V. 調査結果 分析編

※近日公開予定

結果サマリー

障害理解の実態（問1）

社会のあり方に関する考えや、障害・障害者に対する意識、障害の捉え方に関する9つの意見・認識に対する適合度合いを7段階で尋ね、障害理解の実態を測定した結果は以下のとおり。

【2019年の結果】（そう思う計）

㊦ 社会のあり方に対する考え：

共生社会推進への賛同率（障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う 93.4%）、ユニバーサルデザインのまちづくり推進への賛同率（障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う 88.6%）は9割前後と高水準。

㊦ 心のバリアフリー：

障害者への援助行動（障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる 77.3%）、仲間に入れることに抵抗感なし（障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない 72.6%）はともに7割台と高い。
障害問題への無関心者は約1割（障害の問題は、自分にはかかわりがない 10.3%）。

㊦ 障害者に対するステレオタイプ：

「障害のあることはかわいそうだと思う」（46.4%）、「障害のある人は一方的に助けられるべき存在だと思う」（36.8%）といった障害者に対するステレオタイプを持つ人は4割弱～5割弱程度。

㊦ 障害の捉え方：

障害の社会モデルへの賛同率（障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって作り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である 68.0%）は7割弱である一方、障害の医学モデルへの賛同率（障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつぱら個人の適応努力が必要である 34.2%）は約3割半。

【2017年～2019年への時系列変化】

㊦ 共生社会推進、ユニバーサルデザインのまちづくり推進への賛同、心のバリアフリー、障害の社会モデルへの賛同はいずれも、2017年～2018年で有意に増加したのち、2018年～2019年はいずれも同水準で横ばいとなった。

ユニバーサルデザイン社会を実現しようとする人々の意識、心のバリアフリー意識は、2017年以降一定程度に高まりを見せたものの、心のバリアフリーは7割台のレベル、障害の社会モデルへの賛同は7割弱のレベルで止まっている。

㊦ 「障害のある人は一方助けられるべき存在」とするステレオタイプは下降の兆しがみられるものの、「障害のあることはかわいそう」とするステレオタイプは4割台で変化が見られず、この3年間で減少することはなかった。また、障害の医学モデルに対する賛同も約3割程度存在したままで、この3年間で減少することはなかった。

㊦ 2020年に向かう3年間の中で、共生社会、ユニバーサルデザイン、心のバリアフリーといった社会的望ましさを伴う理念に対しての意識はおおむね好転傾向にある一方で、障害者に対するステレオタイプや、障害の原因をもつぱら個人に帰結させる旧来の障害観である障害の医学モデルに関しては、明らかな低下は認められなかった。

社会的障壁に接した場面での行動イメージ（問2）

社会的障壁のある状況での考え方や自身がとると思う行動について、混雑したショッピングモールでの買物場面を例に、このような状況に遭遇したときにどう考えるか、どのような行動を起こすと思うかをそれぞれ「そう思う」、「そう思わない」の2択で尋ねた結果は以下のとおり。

【2019年の結果】（単数回答で「そう思う」との回答比率）

㊦ 改善責任の認識：

「すべての人が安全快適に買い物できる店をつくるのは当たり前のことなので、店はこの状況を改善する必要がある」との、設置者（店）側の改善責任を感じる人は約8割（81.4%）にのぼる。

㊦ ハード面・ソフト面による解決：

解決方法に関する意見として、「狭い通路の売り場をつくらないようにするのがよい」とのハード面での解決方法（88.1%）、「混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにするのがよい」とのソフト面での解決方法（80.0%）が、ともに8割台が多い。

「近くにいる客として、自分が、車いすや乳幼児連れの人に手助けが必要かを聞き、手伝いたい」と、自身がサポートすることによる解決方法は7割弱（68.6%）であった。

㊦ 分離による解決：

「車いすや乳幼児連れの人を混雑した場所に来ないほうがよい」との考えは24.8%、「一般客とは別に、専用の売り場を設けるのがよい」は23.3%、「一般客とは別に、買い物時間帯を設けるのがよい」は17.3%であった。

社会的障壁発生場面において、障害者を社会場面から分離することによる解決策に賛同する人は2割前後の一定数存在している。

㊦ 社会への働きかけ：

「店舗づくりや施設に関して不備に気づいたら、気づいた自分が店舗に改善提案をしていきたい」との考えは、42.4%。社会的障壁を取り除くためのアクションとして自らが社会への働きかけを行う意識がある人は、約4割みられる。

【2017年～2019年への時系列変化】

2017年・2018年は複数回答の設問で聴取したが、複数回答では個々の意見・行動に対する意見が明確に捉えきれない（その項目に選択していないことが、非賛同なのか、単に反応しなかった＝無回答なのかの区別がつかない）ことから、2019年はそれぞれ単数回答で尋ねる形に変更した。2020年調査以降は2019年同様の単数回答形式での設問を予定しており、時系列変化については、次年度以降の調査において行うこととする。

共生社会の実現度合評価 (問3)

いまの日本社会はどの程度共生社会を実現していると思うかについて、0点（全く実現していない）～10点（完全に実現している）のスケールで尋ねた結果は以下のとおり。

【2019年の結果】

㊦ 2019年の日本の共生社会実現レベル(平均値) は10点満点中4.1点

中央（5点）よりも低い採点者が半数を超え（0～4点計57.8%）、大半の人が、2019年時点の日本は共生社会が実現できていないと考えている。

【2017年～2019年への時系列変化】

- ㊦ 日本の共生社会実現レベル(平均値) は、2017年・2018年はともに4.0点、2019年4.1点。
3年間を通じて、共生社会が実現しているとの認識は低いまま推移し、ほとんど変化せず。

調査票

(単純集計結果付)

テーマ:「ユニバーサルデザイン」についてお伺いします

【すべての方に】

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思うものに○をつけてください。(N=1,200)

(それぞれ○は1つずつ)

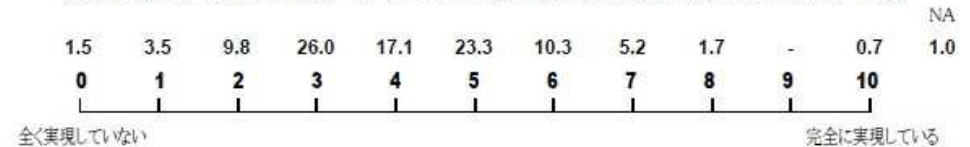
	そう思う	非常に そう思う	やや そう思う	やや 思わない	思わない どちらかでも	思わない あまりそう	思わない	全く 思わない	NA
a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う	38.2	42.9	12.3	4.8	1.4	0.1	0.2	0.2	
b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う	28.3	43.8	16.5	8.8	1.7	0.3	0.5	0.3	
c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う	4.9	13.6	18.3	25.4	21.8	11.0	4.7	0.3	
d) 障害のあることは、かわいそうだと思う	5.4	15.1	25.9	26.3	12.3	9.8	4.6	0.6	
e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる	13.5	29.3	34.6	16.4	3.7	0.7	0.6	1.3	
f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない	15.0	33.6	24.0	20.4	5.0	0.8	0.6	0.6	
g) 障害の問題は、自分にはかわからない	1.2	3.0	6.2	20.1	22.3	25.8	20.5	1.0	
h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もつばら個人の適応努力が必要である	3.4	11.1	19.7	26.3	19.7	13.0	6.3	0.6	
i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によってつくり出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である	12.1	27.4	28.5	24.4	4.6	1.8	0.8	0.3	

問2 「ショッピングモールに多くの人が買物に来ていて、車いすのお客様、乳幼児連れのお客様が混雑の中で買物ができません」

このようなとき、あなたはどのように考えますか。(それぞれ○は1つずつ) (N=1,200)

	→	そう思う	そう 思わない	NA
ア) 自分には関係ない・関わりたくない	→	10.8	88.6	0.7
イ) 車いすや乳幼児連れの人は混雑した場所に来ないほうがよい	→	24.8	74.7	0.6
ロ) 一般客とは別に、専用の売り場を設けるのがよい	→	23.3	76.1	0.7
ハ) 一般客とは別に、買い物時間帯を設けるのがよい	→	17.3	81.8	0.9
ニ) 車いすや乳幼児連れのお客様の代わりに、店員が混雑した会場での買物を代行するのがよい	→	30.0	69.1	0.9
ホ) 狭い通路の売り場をつくらないようにするのがよい	→	88.1	11.0	0.9
ヘ) 混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにするのがよい	→	80.0	19.5	0.5
ヘ) 近くにいる客として、自分が、車いすや乳幼児連れの人に手助けが必要かを聞き、手伝いたい	→	68.6	30.9	0.5
ケ) すべての人が安全快適に買い物できる店をつくるのは当たり前のことなので、店はこの状況を改善する必要がある	→	81.4	18.0	0.6
コ) 店舗づくりや施設に関して不備に気づいたら、気づいた自分が店舗に改善提案をしていきたい	→	42.4	56.6	1.0

問3 いまの日本の社会は、どの程度、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会」を実現していると思いますか。0~10までの11段階でお答えください。(○は1つだけ) (N=1,200)



テーマ：「ユニバーサルデザイン」についてお伺いします

【すべての方に】

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思うものに○をつけてください。(N=1200)

(それぞれ○は1つずつ)

	非常に そう 思う	そう 思う	やや いや ない	どちら でも	あまり そう 思わ ない	そう 思わ ない	全く そう 思わ ない	NA
a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う	41.3	40.9	11.3	4.6	0.6	0.2	0.7	0.5
b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う	32.0	41.2	16.2	8.3	1.1	0.2	0.7	0.5
c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う	6.0	13.7	19.7	30.0	18.3	7.5	4.0	0.8
d) 障害のあることは、かわいそうだと思う	5.5	14.3	27.8	26.2	12.8	7.8	5.1	0.6
e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる	15.3	32.9	29.6	17.1	3.3	0.5	0.8	0.7
f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない	17.3	32.8	22.8	19.6	4.7	1.3	0.9	0.7
g) 障害の問題は、自分にはかわりがない	1.4	2.8	5.3	25.2	22.2	23.8	18.2	1.2
h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もっぱら個人の適応努力が必要である	3.6	10.3	16.8	29.1	16.3	16.0	6.8	1.0
i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によってつくり出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である	12.0	28.9	27.6	24.3	3.5	1.9	0.9	0.9

※「ユニバーサルデザイン」の定義は「障害のある人が利用しやすい環境づくり」を指す。また「ユニバーサルデザイン」の定義は「障害のある人が利用しやすい環境づくり」を指す。

問2 「バーゲンセールのショッピングモールに多くの人が買物に来ていて、車いすのお客様、乳幼児連れのお客様が混雑の中で買物ができません。」

このようなとき、あなたはどのように考えますか。(○はいくつでも) (N=1200)

1	2.6	自分には関係ない・関わりたくない
2	13.5	車いすや乳幼児連れの方は混雑した場所に来ないほうがよい
3	35.6	一般客とは別に、車いすや乳幼児連れの人専用のエリアや通路を設けるのがよい
4	14.9	一般客とは別に、車いすや乳幼児連れの人たちの買い物時間帯を設けるのがよい
5	9.3	車いすや乳幼児連れのお客様の代わりに、店員が混雑した会場での買物を代行するのがよい
6	44.1	狭い通路の売り場をつくらないようにするのがよい
7	47.7	混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにするのがよい
8	28.8	近くにいる客として、自分が、車いすや乳幼児連れの人に手助けが必要かを聞き、手伝いたい
9	47.2	すべての人が安全快適に買物できる店をつくるのは当たり前のことなので、店はこの状況を改善する必要がある
10	6.9	店舗づくりや施設に関して不備に気づいたら、気づいた自分が店舗に改善提案をしていきたい
11	2.1	その他()
12	3.0	特に何も思わない

NA 0.5

問3 「ローカル線無人駅A駅。」

この駅で電車に乗るには、駅舎の改札口から構内の踏切を渡り、島式ホーム(高さ約1メートル)まで階段を数段上がらなければなりません。

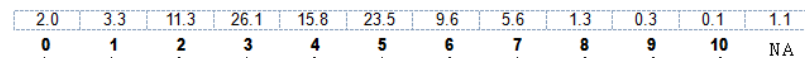
電車が来る数分前に、日本語で、電車の行き先や車両数などの自動音声アナウンスがありますが、直前のアナウンスはありません。」



このような鉄道サービスについて、あなたはどのように考えますか。(○はいくつでも) (N=1200)

1	64.3	この駅の状態では、乗降が困難となる人ができそう
2	22.3	この駅の状態には問題があるが、すべての駅を改修することは難しいので、しかたない
3	5.9	乗降が困難な人は、この駅の利用をあきらめるしかない
4	36.7	乗降が困難な人がいたら、駅員がいないので、まわりの乗客が善意でサポートすればよい
5	10.4	駅のあり方について不備に気づいたら、気づいた自分が鉄道会社に改善提案をしていきたい
6	41.1	鉄道会社は、乗降が困難な乗客への対応を、乗客の「やさしさ」に頼って放置してはいけない
7	32.3	この駅で乗降が困難な人がでるのは、困難に感じる人の問題ではなくて、この駅の状態を放置して営業を続けていることに問題がある
8	41.9	交通サービスが誰にとっても不便や不都合なく利用できる社会にするのは、社会の責務だと思う
9	1.8	その他()
10	3.9	特に何も思わない
11	0.8	乗降が困難な人がいても、自分には関係ない・関わりたくない
NA	0.8	

問4 いまの日本の社会は、どの程度、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会」を実現していると思いますか。0~10までの11段階でお答えください。(○は1つだけ) (N=1200)



全く実現していない

完全に実現している

問5 あなたの身近に障害のある人がいますか。あてはまるものを全てお答えください。(○はいくつでも) (N=1200)

1	13.3	家族	3	8.8	友人	5	20.0	知人	7	52.4	いない
2	1.5	自分	4	3.3	同僚	6	5.6	その他()	8	4.6	答えたくない

NA 0.3

2017年

テーマ:「ユニバーサルデザイン」についてお伺いします

【すべての方に】

問1 下記について、あなたの考えとして、もっとも近いと思われるものに○をつけてください。

(それぞれ○は1つずつ)

	非常に 思う	そう 思う	そう や や や や	ど ち ら だ も	思 わ な い	あ ま り 思 う	思 わ な い	そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い	NA
a) 障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切にし支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会を実現すべきだと思う	40.5	34.4	13.5	7.5	0.7	0.3	1.2		2.0	
b) 障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず、多様な人々が利用しやすいよう、あらかじめ都市や生活環境をデザインすべきだと思う	31.0	36.3	17.5	10.5	1.0	0.3	1.3		2.0	
c) 障害のある人は、一方的に助けられるべき存在だと思う	5.9	14.6	20.0	27.7	15.7	7.6	6.2		2.4	
d) 障害のある人はかわいそうだと思う	5.8	11.8	27.2	26.8	11.6	6.8	7.5		2.6	
e) 障害のある人が困っているときには、迷わず援助できる	13.0	28.4	30.3	18.8	4.4	1.2	1.2		2.8	
f) 障害のある人を自分たちの仲間に入れることに抵抗感はない	15.3	29.0	23.4	22.2	4.4	1.9	1.5		2.3	
g) 障害の問題は、自分にはかわからない	2.0	3.6	7.8	29.0	18.1	18.1	18.6		2.8	
h) 障害は、病気や外傷等から生じる個人の問題であり、障害の原因を除去・対処するには、治療や訓練等もばら個人の適応努力が必要である	4.9	9.5	18.4	33.4	13.8	9.5	8.2		2.3	
i) 障害は、個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によってつくり出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務である	13.0	23.3	26.5	27.8	4.4	0.9	1.7		2.5	

※e:「心のバリアフリー」に向けた乳用性のある研修プログラムの基本プログラム評価ツール「研修における評価アンケート集形②」より
abcd: 内閣官庁「ユニバーサルデザイン2020行動計画」より h: 文部科学省「障がい者制度改革推進会議資料」より

問2 「パーゲンセールのショッピングモールに多くの人が買物に来ていて、車いすのお客様、乳幼児連れのお客様が混雑の中で買物ができません。」
このようなとき、あなたはどのように考えますか。(○はいくつでも)

- 2.3 1 自分には関係ない・関わりたくない
- 17.3 2 車いすや乳幼児連れの人は混雑した場所に来ないほうがよい
- 35.1 3 車いすや乳幼児連れの人の専用の買物エリアや通路、時間帯などを設けるのがよい
- 8.0 4 車いすや乳幼児連れのお客様の代わりに、店員が混雑した会場での買物を代行すべき
- 42.3 5 狭い通路の売り場をつくらないようにすべき
- 45.1 6 混雑時は、店側がお客様を順番に少しずつ店内に誘導するなど、誰もが買物できるようにすべき
- 24.8 7 近くにいる客として、自分が、車いすや乳幼児連れの人に手助けが必要か聞き、実行する
- 10.0 8 店舗の環境づくりの不備・改善点を気づいたら、気づいた自分が店舗に提案・要求していく
- 1.0 9 その他()
- 7.4 10 特に何も思わない

NA2.5

問3 いまの日本の社会は、どの程度、「障害の有無にかかわらず、女性も男性も、高齢者も若者も、すべての人がお互いの人権や尊厳を大切に支え合い、誰もが生き生きとした人生を享受することのできる共生社会」を実現していると思いますか。0～10までの11段階でお答えください。(○は1つだけ)

0.5 4.1 12.7 23.5 14.8 22.8 7.8 4.3 1.7 0.3 0.3 NA7.3
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

全く実現していない

完全に実現している

問4 あなたの身近に障害のある人がいますか。あてはまるものを全てお答えください。(○はいくつでも)

1 家族	2 友人	3 同僚	4 知人	5 その他()	6 いない
14.1	6.0	2.8	19.9	5.8	57.3 NA1.5

《 引用・転載時のお願い 》

本レポートの外部への引用・転載の際は、下記連絡先にメールにて掲載のご連絡をお願い致します。

連絡先：日本リサーチセンター広報室 メール：information@nrc.co.jp

**掲載では必ず当社クレジットを明記していただき、
調査結果のグラフ・表をご利用の場合も、データ部分に当社クレジットの掲載をお願い致します。**